

上条

報告

第37号
平成24年6月

甲州市教育委員会
☎32-5097

有馬晴信をご存知ですか？

有馬晴信は、戦国時代から江戸時代の初めにかけての肥前国日野江藩（今の長崎県のあたり）の藩主であり、キリスト教を崇拝した「キリシタン大名」としてよく知られています。

晴信はキリシタン大名として数奇な運命をたどり、肥前国から遠く離れた甲斐国谷村領の丸林に幽閉された後、斬首され生涯を終えますが、そこは甲州市大和町丸林地区のことです。

今年是有馬晴信が処刑されて四〇〇年という節目の年にあたり、命日である五月六日に大和町丸林地区で、記念祭が行われました。記念祭は有志が企画し、有馬家の現当主、晴信夫人の子孫、研究者など、百人を超える参加者が集まりました。



丸林地区で行われた晴信公 400 年祭の様子。



子孫・関係者の記念写真。

有馬晴信について

有馬晴信は、兄の義純が早世したためわずか四歳で家督を継承しました。当時の有馬氏は、龍造寺氏や西郷氏などの有力者に圧迫され、臣従させられていたが、天正十二年（一五八四）、十七歳のとき龍造寺氏を滅ぼし、地盤を固めました。

地盤固めに成功したのは、海外貿易によりもたらされた鉛や硝石などの軍事物資を得られたことが大きく、感謝の意から天正八年に洗礼を受け、「ドン・プロタジオ（ドン・ジョアンとも）」の洗礼名をいただき、以後熱心なキリシタンとなりました。天正十年（一五八二・この年に田野の景徳院で武田勝頼が自刃、武田家滅亡する）には大友宗麟・小西行長・大友純忠らキリシタン大名とともに、ローマへ四少年を使節団として派遣しています。彼らは「天正遣欧少年使節」と呼ばれ、日本史の教科書にも記載されています。

有馬晴信の落日 岡本大八事件

その後、小西行長とともに朝鮮出兵に従軍、二十六歳から七年間を朝鮮で過ごしました。慶長五年（一六〇〇）の関が原の合戦では当初西軍に属していましたが、西軍惨敗とともに東軍へ寝返り、小西行長の宇土城を攻撃、その功績により旧領を安堵されました。

慶長十四年（一六〇九）、マカオで晴信の朱印船乗組員がマカオ市民と争いになり、家臣も含め四十八人が殺されるという事件が起きました。晴信は直ちに徳川家康に仇討ちの許可を求めましたが、そのうちマカオにおけるポルトガル側の責任者アンドレ・ペッソアを乗せた船が長崎に入港し、晴信は船長を捕らえるべく、多くの軍船でポルトガル船を包囲しました。

これをみた船長は、乗員を逃して船を爆破させ、事件はいったん収まりました。

その後、家康の重鎮・本多正純の家臣だった岡本大八が晴信に近づき、ポルトガル船を沈めたため家康が恩賞を与えるだろうと持ちかけました。ですがこれは偽りであり、大八は晴信をだまして多額の口利き料をせしめました。これが発覚し大八は火あぶり、晴信は贈賄の罪により甲斐国丸林に追放されました。

晴信は甲斐国への流罪で終わると思ったのですが、家臣や夫人を伴って入甲しましたが、結局数日後に切腹を仰せつけられました。晴信はキリシタンなので、家臣に首を切り落とさせたとのことです。慶長十七年（一六一二）五月六日のことでした。

有馬家のその後

晴信の死後、家督は子の直純に継がれますが、日野江藩から日向延岡藩（宮崎県）、越後糸魚川藩（新潟県）を経て越前丸岡藩（福井県）へ移り、以後有馬家は幕末を丸岡藩で迎えました。現当主は京都にお住まいで、二十七代を数えます。

晴信の夫人は京都の公家・菊亭家の出身で、夫と同様洗礼を受け、「ジュスタ」という洗礼名をいただきました。夫の亡き後は京都へ戻り、京都御所の東側にある廬山寺にお墓があります。



菊亭ジュスタの子孫である志賀さん。



なんと天正遣欧少年使節の一員・中浦ジュリアンの子孫、小佐々さん。

没後400年 有馬晴信へ祈り

死去の地・大和で記念祭

キリシタン大名の生涯しのお

山梨で生涯を開いたキリシタン大名をしのぶ「有馬晴信公没後400年記念祭」が6日、甲州市大和町初鹿野で開かれた。有馬家27代当主の有馬匡澄さん（京都府）や同町初鹿野の諸所（幽閉された住まい）の跡を守ってきた家臣・有賀家、県内外の関係者ら約100人が参列して、天国の有馬晴信に祈りをささげた。

峡東



記念祭は、国道20号（甲州街道）の丸林橋のたもとにある諸所の跡で開かれた。匡澄さんのほか、有馬晴信の夫人菊亭ジュスタの子孫である志賀賢子さん（70）や、終焉の地が大和町であることを特定した中央大人文科学研究所の清水絨一客員研究員らが顔をそろえた。

昨年12月に有馬家27代当主となった匡澄さんは、「晴信公は不運の最期を遂げたが、400年たった今でも、みな有馬晴信をしのんで、祈りをささげる神父や関係者ら」

甲州市大和町初鹿野

さんに愛されていることを再認識できた。出席してよかったと話した。

な気持ちとともに懐かしい感る嵐山寺（京都）で有名なキヨウの花を植樹した。言い伝えでは、晴信斬首の日は雷雨に見舞われたとい

い、この日の会場周辺が同じ天候となり、出席者は驚いていた。記念祭の後は、同市の甲斐の国大和自然学校で交流会も開かれ、有馬晴信談義に花を咲かせていた。

「山梨日日新聞」 五月八日付け



丸林区にお住まいの有賀さん。紙位牌の持ち主。110年振りに有馬家から有賀家へお礼の品が渡されました。

有馬家と有賀家

丸林区の有賀さんというお宅には、紙に書かれた有馬晴信の位牌が伝わっています。有賀さんのご先祖は晴信とともに入甲した家臣だったといわれ、毎年五月六日の命日には、丸岡藩から有馬家が正装してお参りにきて、二三日有賀家に滞在していたそうです。明治三十四年の大水害により、日川のほとりに所在した晴信のお墓（と思われる場所）が流されてしまったため、年々続いたお参りも途絶えてしまいました。

今回の記念祭には、京都から有馬家第二十七代ご当主が、実に一一〇年ぶりにお見えになったほか、晴信夫人の菊亭ジュスタの子孫の方、天正遣欧少年使節の一員である中浦ジュリアンの子孫の方など、歴史上の人物に繋がる方々が参加されました。

有馬晴信終焉の地・丸林

有馬晴信については、長年不明な点が多く、その研究はあまり進んでいませんでした。その大きな理由として、キリシタン大名だったことが挙げられます。晴信の子直純は、有馬家を断絶させないようにするため、キリスト教から仏教に宗旨替えをし、さらに晴信の影響力のあった日野江藩を離れ、最終的に越前丸岡藩という、まったくの新天地で有馬家の基礎を固め直しました。当然、その過程の中で晴信のことについては世間から忘れ去られ、どこで亡くなったかも定かではありませんでした。

調査によって、大和村丸林区が終焉の地だと判明したのは昭和五十四年のことで、決め手となったのは、



有賀家に伝わっていた紙の位牌と、明治の中頃まで丸岡藩から命日にお参りにきていたという口承でした。余談ですが、大和町木賊に所在する天目山栖雲寺に所蔵されている「虚空蔵菩薩画像」は、十字架を持っている尊像として知られています（「上条報告」第二十五号参照）が、これも昭和五十四年に見出されたものです。そのため、この画像は有馬晴信の肖像画であるとも言われてきました。制作年代により肖像画説は否定されていますが、有馬晴信の持ち物だったという考えは、今なお根強く語られています。

合併により誕生した甲州市ですが、まだまだ私たちが知らない歴史や文化財が眠っているそうです。